


 書評

加藤 敏 著

人の絆の病理と再生

臨床哲学の展開

井原 裕

精神病理学の課題は、究極において、「人間とは何か」という問いに、臨床的観点から解答を与えることにある。それは、神経科学の侍女でも、精神療法の技術論でもない。精神病理学は、学祖たる西丸四方、島崎敏樹、村上仁以来、広範な人間学的関心の上に進められてきた。島崎の「人格の病」が『思想』に掲載されたように、学の出発からして思想的なものへの志向性を有していた。「哲学と精神医学」あるいは「人間学と精神医学」のテーマは、精神病理学のレゾン・デートルそのものである。

本書の著者は、学生時代から哲学に傾倒。独仏の文献を渉猟したデビュー論文「哲学と精神医学」(加藤敏、宮本忠雄：精神医学 23：748-767, 1981)を本誌に寄稿したときは、まだ32歳の青年であった。2年後、『自己-事物-他者』の三項関係から見た分裂病(臨精病理 4：57-78, 1983)を発表。現象学の基本概念「パースペクティブ」を精神病理諸症状において論じた。以来、著者は、デビュー以来のテーマを一貫して追求。今や、安永浩、木村敏、中井久夫といった‘great thinker’の系譜を引き継ぐ存在である。

これまで著者は、ハイデガー、ルソー、ヘルダーリン、西田幾多郎らの著作と向き合い、人間観を育んできた。本書では、アウグスティヌス、ヤスパース、シモーヌ・ヴェイユ、メルロ＝ポンティ、アリストテレスらとの対話を試みている。古今の知的遺産をリスペクトする姿勢は、フロイト、エレンベルガー、ラカン、木村敏といった精神医学者が、古代ギリシャ以来の西欧思想と対峙しつつ、思索を展開してきた姿と重なる。

冒頭に人間のあり方の構図が示される。それは、構造的に自己優位性をはらむパラノイア性と、言葉による〈もの〉からの疎隔を運命づけられたメランコリー性との二要素をはらむ。エレンベルガーの「無意識の神話産出機能」にパラノイア的な語りの由来を見出した著者は、そこに潜む自己破壊と他者攻撃の危険を見逃さない。アウグスティヌスの終わりのなき自己分析において、著者は、構造的メランコリーを引き受けることに、彼の信仰の本質を見出した。解消不能のメランコリーに耐えるアウグスティヌスに対し、強い利他性をはらんだ実存的行動ヘアンガー・ジュマンしたシモーヌ・ヴェイユは、いかにも痛々しい。「聖なる無食欲症 holy anorexia」とは、彼女なりの神学に基づく献身が、精神病理学的に自傷行為に通じる破壊性をはらんでいたことを暗示している。

著者の臨床哲学のゴールは、「人間の相互承認に向けた倫理確立」にある。精神科リハビリテーションの鼻祖 加藤普佐次郎が巨視的なスケールで全人類のこころの健康を説いたのは、古きよき昭和であった。もはや、誰も人類救済の物語を信じない平成の時代にあって、人間の相互承認は可能か。パラノイア性の自傷他害に陥ることなく、依然として倫理を語り得るか。普佐次郎翁のDNAを、著者が今後、絶望の時代にどう思想として顕現させるのか。本書では、その序説が語られたにすぎない。

(獨協医科大学越谷病院こころの診療科)

●A5 270頁 2010 定価3,990円(本体3,400円+税) 弘文堂

■ 訂正とお詫び ■

本誌 53 巻 4 号 409 頁掲載の書評「人の絆の病理と再生—臨床哲学の展開」につき、以下の誤りがありました。訂正し、お詫び致します。

○右下の定価

(誤)

定価 3,990 円 (本体 3,400 円＋税)

(正)

定価 3,570 円 (本体 3,400 円＋税)

『精神医学』編集室